

らじかる



第5号

エマ・ゴールドマン・アンソロジー

「女性解放の悲劇」を続いで

最後のページをめくった後も、それから再び挟みこまれた写真のエマを見つめ返しても、どうにもエマにのめり込めない自分——昨夜までの、祭りの唄や太鼓の音は、もうこの部屋には聞えない——を、どう判断したらいいのか迷うということは、いくばくかの誠実さと、心のどこかに衝撃を受けたことの証しなのだが、さてそれがどのようなものなのかといえ、これもまた、何様にも取り留めのないものになってしまい、私がより政治的で、エマがよりアナキーということなのか、私が賢しらで、それだけエマの情熱を単純さとしか捉えられないのか、これも又、浮遊状態の中で、それでも必死に何かを握もうとすると、ふいに仲間に囲まれたマフノの笑顔が脳裡に浮び、次の瞬間には、クロンシュタットを攻撃する赤軍の姿に、憎悪と呪いが閃光のごとく体中を駆け巡り、身も心も怨念の固りになろうとすると、再びエマが現われ、彼女の明るさが、ちがうのよ、と私を諭す。いっせ、たいした理論家じゃないのだから、アナキズムの理論から切り捨てれば、心もだいぶすつきりするのかもしれないが、生憎、私も暗いとなると、これはもう、どうでもいいということだ。だから、ここで日本のウーマン・リブについて書くと、これもまたまったくもってよくわからない。すごく革命的なような気もするし、全然革命的じゃないような気もして、あれを現代の駆け込み寺と言った奴がいたけれど、それで、私にはどうしてもエマが男に思えてしょうがないのだ。女性の

アナキストがいても不思議ではないのに、エマが女であることを不思議の方が不思議な時代なのかもしれないとは思いつつも、今のアナキストなんて、皆さん私と同じじゃないのか。とにかく私としては、この本をアナキストやウーマン・リブの^おともてよりも、普通の女の子に読んでもらいたいと思った。これこそ現在のパンチの利いた教養書であり、その意味じゃあ、私も普通の常識人ということになるのだろうか。ところで、祭りの事だけれど、さっき行ってみたら、当然のことだが、境内には誰もいなかった。

〈くもい 流〉

直感アナキズム

西塔昌弘

言葉とは、政治の領域に属するものではないだろうか。例えば、言葉は完全に自分を表現するだろうか。言葉によって表現された自分と乖離した自分というものを、たえず感じないだろうか。言葉によって表現された自分と、それによって満されない自分との間の選択で、アナキズムは、後者、言葉によって表現されない自分を選ぶ。そして、自分ばかりでなく、他者に対しても、その人の言葉によって表現されたその人ではなく、言葉によって表現されないその人を、問題にしているとする。言葉がアナキズムにとって、何らかの有用性があるとすれば、その創造性(実際は、言葉にそのようなものはないのだが)ではなく、その破壊性だろう(そして、それは、政治的行為だ)。アリストテレスにおいては、ロゴスは真理だった。しかし、カントに

おいては、もはや、神の存在は論理的に説明できず、確信(信仰)の領域へと押しやられることで、逆に論理は破壊的に作用している。もっともヘーゲルにおいて、再び論理は、弁証法として神に関わるものとされたが、しかし、それは何ら自立したものではなく、現実には、マルクス主義のように、生産主義と野合することによって、かろうじて延命しているにすぎない。すなわち、言葉には、自己矛盾に落入る性質があるし、それを弁証法的にのりきろうとしても、現実には、弁証法的論理学を否定する、古典的論理学者も存在するというように、どこまでいってもこの自己矛盾性から言葉はのがれることができないのであり、逆にアナキストは、この言葉の自己矛盾性を破壊性として利用していくのだ。

では、言葉によって表現されない自分と他者との間の、コミュニケートの回路はあるのだろうか。そのコミュニケートの回路として、アナキズムは直感というものを設定する。何故なら、言葉を媒介としない自分と他者との関係は直接的であること。すなわち、それは自分あるいは他者が問題となるのではなく、自分と他人との関係が問題となること、そこでは、自分と他人とは分離されて捉えられるのではなく、一つの結合された不分離なものとして捉えられるのであり、直感とは、直観+行動とでもいえるものであって、それが直接つながっている、すなわち、自分と他者との一つの有機的に結合した不分離なものとして表われてくるからだ。直感においては、自己のみでありえないし、他者のみでもありえず、自分と他者の存在においてはじめて生じ、しかも、その自分と他者との関係そのものが自己の行動として表われる。このことからみて、言葉によっては表現されない自分と他者との間のコミュニケートが直感という回路を

通じることが、今のところ、もっとも妥当といえる。

言葉とは政治的カテゴリーに属すると言ったが、アナキズムは決して政治主義ではないけれど、政治を拒絶するものでもない。しかし、反政治主義であるにもかかわらず、政治を受け入れるという事は、一つの矛盾であることも確かだ。しかしそのアナキズムの矛盾が、一方では反作用的に体制にとっても矛盾となる(アナキズムの矛盾が、そのまま体制の矛盾となるということは、一見それこそ矛盾してみえるが、しかし、それは体制が政治的であることの何よりの証拠だ)。そして、物理学と違うところは、作用と反作用の力がたえず等しいものとして働くのではなく、アナキズムはその思想性を強めることによって体制はその政治技術をより高度化させることによって、相手の自己矛盾の大きさはそのままにして、自分の自己矛盾だけを小さくしていくことが可能だということだ。アナキズムの側からいえば、アナキストの思想性が、その政治的行動が引き起す自己矛盾を上まわっている限り、その自己矛盾は相殺されて、その力はゼロであり、ただ、体制側の矛盾のみが反作用的に生じるということになる。この事からまた、アナキストが思想的に高まれば高まるほど、それだけ強力な政治行動をとることができ、体制の矛盾の方は、それだけ拡大されていくということだ。ただ、ここでの大原則は、アナキストは、その思想性を越えた政治行動を断じてとってはならないという事だ。

では、ここでの思想性とはどういうものだろうか。当然それは言葉では表現できないし、ただ行動として(特に日常的な)現われる。そしてアナキストの思想性は、他のアナキストの行動や言葉に感動した、あるいは共感した自分を見つめ、そんな自分を拡充していくことによって形成されていくものだろう(この場合の言葉は、そのアナキストの思想性が、その言葉の政治性を越えているときにのみ有効であるだろう。すなわち、言葉が、その言葉を否定するアナキズムの思想性を形成すること自体、言葉にとっては自己

破壊的であり、逆にアナキズムは、その言葉の自己矛盾性を利用するのだ)。すなわち、アナキズムの思想性とは、感動や共感のその中にこそあるのだ。そして、言葉に対する感動さえも思想性に転化していくことができるからこそ、逆にアナキズムの思想性は政治を超えることができるのだ。

カール・シュミットは、政治とは敵と味方に分けることだと言ったけれど、アナキズムから言わせるなら、味方内部においても、政治はありえるという事だ。アナキズムにおいて、思想性において結合した関係のみが非政治的なのであって、それ以外の関係はすべて政治的である。自由連合制とは、それ故、アナキズムにおいて、味方内部における政治的組織原理ということができる。労働組合、あるいはその他の職場、地域の運動体、と呼ばれるものも、その大部分は政治的な内部関係をもつものとしてしかありえないだろう(この意味からも、アナルコ・サンジカリズムのように、労働組合に肯定的には関われないのだ。組合が、破壊の要素になりえても、創造の要素になるとは思えない)。アナキズムにおいて、思想性が違うからといって敵とは限らない。といって、味方だからといって、すべての関係が非政治的であるとも限らない。アナキズムにおいては、思想性が政治と非政治性を分け、思想が敵と味方を分けるのだ。そして、僕が直感アナキズムの名で追求しようとしているものは、以上のような意味での非政治的関係をいかに形成し、拡大していくかということなのだ。

思 索

桜井 博

喜びと悲哀とが交わる素朴な生活の中から
歓喜ある独自の美的構造次元への純粋な精神
の萌芽を造出しようとするとき、偶然的な衝
撃によって表現能力は無限の激越を含んだ行
動表出をとめないながら矛盾対位の秩序を破
る息吹きを意識する。

「理想なんてすべて危険物なのである」と
はオスカー・ワイルドの言った言葉であった
と思うが、私の経験によれば、自分の信じた
理想の世界を生きることは極めて危険な観念
の世界を思索し、魂の仮死状態を否定するこ
ころの思想的骨格を自分の内部に創造するこ
とであるように思う。

人類の幼児期の感傷的な理想郷へのあこ
がれにも似た創造の意志の生成の底流には、
苦悶へと続く極めて幾多の錬成がある。己れ
の心に新しい火を燃やす積極的な生成の感
情は現代の洗練された権力者どもに向けての
敵愾心にはかならない。これが叛逆心に非ず
して何んと呼ぼう。

権力者の蛮力には抵抗しなければならない。
抵抗する姿を粗雑にすることは洗顔をさらけ
出すことにかならない。

孤独なる憂憤者が「新世界」への出発と発
展を可能にするとき、はたしていかなる行動
者とならねばならないか、厳正なる断を下さ
なければ、現在の逆境にあまじなければなら
ない。しかし、豪気だけでは現状を危険な
ものに変化させることはできない。

パンフレット

個人・社会・国家 エマ・ゴールドマン著
A 5判 P18 定価 130円 円35円

政治の正義—財産編— ウィリアム・ゴッド
ウィン著 B 6判 P180 定価400円 円80円

フランス人よ共和主義者になりたければ更
に努力を! マルキ・ド・サド著 A 5判
P 86 定価250円 円45円

“大地”誌に発表された幸徳事件 A 5判
P 64 定価200円 円45円

東京都新宿区東大久保1-464 松喜ビル
バルカン社 電03(354)1039振替東京64906

出版物取次販売

自由図書販売

千葉県船橋市藤原町2-229 岩永文夫
TEL 0474 (44) 6448

イデア出版案内

彼は疲れ切ってみえました。去るのを引きとめなかった。彼はわたしの手をとって辛らそうな様子で歩み去った。わたしもまた、疲れ、言いがたく悲しかった。二人のゴーリキのうちどちらがロシア人の魂に近いのだろうか？ あれが「マーカー・チュードラ」「チエルカーシ」の作家、「どん底」の著者、くもの言わぬ残酷な野蛮人ゝのロシア大衆の語り手なのだろうか？ ゴーリキがどれ程、民衆を子供らしく偽らないものとし、またその挫折をどのように描いたことでしょう！ あれがロシアの本当の魂だろうか？ ここでゴーリキが描いてみせたの

はレーニンに耳打ちする人としてのゴーリキではないだろうか？ それはこう言うのです。「一千万の民衆、野蛮人は鎖につなぐ野蛮な方法が必要だ。」

—エマ、ゴーリキと語るより—

- ▶ わが生涯を生きるより
- ▶ アナーキズム
- ▶ 女性解放の悲劇
- ▶ クロンシュタットの印象
- ▶ P・クロボトキンの印象
- ▶ 裏切られた革命 —他—

女性解放の悲劇

定価 750円（送料共）

本書を置いてくれた書店との関係で、直接購読の皆さまへは、送料共で定価と同じ750円でお送りすることになりました。

受贈書

黒色戦線社版『労働運動』 大杉の「労働運動」の第1次から第4次までの完全複製版。
群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎気付
黒色戦線社

河野信子著『女の論理Ⅰ』 無名通信に同題で連載中のものをまとめたもの。あと、性、文化、政治などの項が予定とのこと。柳川市一新町1の5 柳下村塾出版

ミニ・ニュース

9月の15日から16日にかけて、東京・長野・名古屋・京都で、大杉の5回忌の集会が共同行動として催された。今後とも、このような輪が広がっていく必要があるだろう。

お願い

エマ・ゴールドマンの「女性解放の悲劇」の読後感を送って下さい。原稿用紙2枚から2枚半程度。

お詫び

「らじかる」4号中、「読者だより」の笠田さんの文中次のカッコの部分が欠落していたことを、お詫びします。「…しかし、現代のアナキズムは過去の本能と直感に基づくアナキズムから袂別し、アナキズムを理論的に確立することに、その現代的課題があるのではなかろうか。この点で（西塔氏の『直感アナキズム』に対し僕は否定的である。アナキストの組織は自由連合である。その自由連合アナキズム運動を作りだしていくのは自由な討論である。）西塔氏のいわれる無言の直感ではなく、それこそ言葉による開かれた対話である。……」

らじかる 第5号

発行日・1973年9月1日
編集人・西塔昌弘
発行人・はしもとよしはる
発行所・イデア出版
東京都新宿区東大久保1-464 松喜ビル
TEL 03-354-1039
年間購読料 300円